

釧路市における二つの水産関連顕彰碑 (2)

野村哲一

漁業功労者 嵯峨久^{しょうとくひ}「頌徳碑」

JR釧路駅から北大通りを北進し観光スポットである幣舞橋を渡ると、その左手の、地元で富士見坂と呼んでいる坂の上に、台座も含めると高さ5m余りの大きな像が設置されている(写真1)。銅像部分は、双眼鏡を持った正装の紳士が釧路川の河口部分にある釧路港を眺めながら、悠々とたたずむ姿の高さ2.4m余りの像である(写真2)。

この碑が、漁業功労者 嵯峨久(1876年-1960年)を顕彰するために、釧路発動機漁船組合により昭和5年(1930年)に釧路市南大通2丁目2番地に建立された頌徳碑である。碑の台座の裏側には『嵯峨久君壽像・・・』ではじまる碑文(写真3)があり、嵯峨久の経歴、ニシンやマグロ漁における活動、マグロ漁船の大規模な海難事故に対する思いや、水産界での活動、その人となりなどが刻まれている。銅像製作は当時の富山県立工芸学校教諭の松村秀太郎が原型を、山本興三次郎が鋳造を担当して製作されたことも台座に刻まれている。



写真1. 漁業功労者 嵯峨久の頌徳碑



写真2.
嵯峨久の銅像部分



写真3. 建立当時のままとと思われる台座背面にある碑文

久は水産都市釧路の黎明期に動力船を用いた機船漁業を初めて導入し、民間人でありながら現在の釧路副港の前身である嵯峨漁港を整備するなどし「釧路の水産業の父」とも呼ばれた人物である。

佐野孫右衛門紀功碑の紹介(注1)で記した、明治初期の釧路の水産業の混乱した困難な時代を経て、釧路の水産業が拡大し始めた明治末期からの久の人生も苦難の多いものであったようである。

久は秋田藩士の三男として明治9年(1876年)に生まれ、七歳の時に現在の根室市に移住、その後函館で海産商の駐在員となる。三十歳の時、根室市でトロール漁業を試みるも失敗。明治40年(1907年)に来釧、ニシンまき網漁業を導

入、小ニシンの最盛期であった釧路では好成績をあげた。大正3年(1914年)には飯塚城之助らと漁業組合の貸付資金などを活用し、率先して発動機船をマグロ流網漁業に採用し、釧路における機船漁業の先駆けとなった。

当時の釧路ではマグロ漁が開始されてはいたが、川崎船と呼ばれる動力を持たない小型の和船による漁業であり、大正2年8月にはマグロ漁船18隻が遭難し、60余名が亡くなる大きな海難事故を引き起こしていた。川崎船から動力船への転換は漁業の効率化ばかりではなく、安全操業確保への大きな貢献となった。

釧路市総務部地域資料室(2003)には、昭和初期に釧路の魚市場に水揚げされた多数のマグロが並ぶ写真が掲載されている。この時期の釧路におけるマグロ漁は、布施(1973)によると年間300万貫(1万1千トン)に及んでいたとあり、動力船の導入により釧路のマグロ漁は大きな発展を見せ「釧路の鮪か、鮪の釧路か」と称されるまでになり、東京へ輸送する冷蔵船が不足する事態まで起きたとされている(鳥澤2004)。

久はその後、釧路発動機船組合を作って漁業界を組織化したり、生産者市場を開設経営し、さらに民間人でありながら、現在釧路副港と呼ばれている場所に、嵯峨漁港と呼ばれた漁港を整備することにも尽力した。当時の釧路における水産業の経済規模はまだ小さく、漁港の建設資金の確保には苦労したようである。

昭和初期より構想された嵯峨漁港は、久の数年間の奔走の結果、釧路発動機船漁業組合員が株主の主体となり釧路漁港株式会社を設立、建設開始にこぎつける。背景としては、釧路の北洋漁業の前進基地としての重要性があったことなどから、昭和12年に嵯峨漁港は完成を見る。これらの業績に対して多くの人が嵯峨久を「釧路の水産業の父」と呼ぶようになったのである。

この頌徳碑もまた、時代の流れに翻弄され数奇な運命をたどることになる。第二次世界大戦中には、台座部分を残し金属部分(銅像部分)は供出のため撤去され、長く台座のみの状態と

なってしまう。銅像ばかりではなく、久が建設に尽力した嵯峨漁港は、昭和20年(1945年)の米軍による大空襲で壊滅的な被害を受けた。戦後までしばらく像不在の状態が継続したが、釧路港の復興に伴い再び久の顕彰のため、像を復元する声が地元の漁業者らから起こり、昭和36年(1961年)に現在の銅像が再建された。幸いな事に前記した最初の銅像の製作者に再び依頼することができ、最初の建立時と同じ像が復元された。そのため、碑の裏面には昭和5年の設置時の碑文が刻まれているのに対して、像正面の碑の名称を示す額は再建当時の町村金五北海道知事が揮毫したものとなっている(写真4)。



写真4. 再建時当時の北海道知事町村金五書による台座正面の額

嵯峨漁港から発展した釧路港は、一時水揚げ量全国一となるまでに発展したが、久の活躍した時代の、ニシン、マグロは姿を消し、マイワシの漁獲も減少している。ここ数年は10万トン台の水揚げ量となり、平成27年度の水揚げ量は全国6位、28年度は全国4位と低迷し、再び大きな困難に向き合っている。

この記事を作成するに当たり、わずかではあるが釧路港の発展、機船漁業の歴史に触れることができた。釧路に限ったことではないが(長谷川2008)、明治初期には本州、はては四国、九州からも嵯峨久のように多くの人々が、偉大な

夢を抱いて北海道へ移住し、人とともに「川崎船」のように多くの技術も移転してきた。それらの人と技術が、北海道の多くの自治体で釧路と同様に、幾多の苦難の末、水産を地域の基幹産業まで拡大させたのであろう。

時の流れか、頌徳碑の釧路港側（釧路川河口部分）にはマンション等が建設され、碑からの港の眺望は少し悪くなっていた。それでも、建物の間からは北海道区水産研究所の調査船も見えるなど、水産に関係する者にはやはり感慨深い場所である。この頌徳碑周辺は巨大な生涯学習センターなどが整備された地域であるのに対し、残念なことに、この碑のある一角は未整備の感が漂っており、釧路の水産の歴史が「風化」するのはとの寂しさも感じた。

頌徳碑の碑文は、読み取ることの難しい文字、語句等があり、正確ではないが、参考までに紹介する。

この記事を作成するにあたり以下の資料を参考させていただきました。また釧路市水産課の方々から貴重な情報、ご助言を頂きました。感

謝申し上げます。

布施 正. 1962. 釧路漁業発達史. 釧路叢書, 第4巻, 403p, 釧路市.

布施 正. 1973. 釧路水産史. 207p, 釧路市.

布施 正. 1985. 漁業基地釧路, 釧路新書, 4,214p, 釧路市.

長谷川英一. 2008. 明治時代の静内にもみる漁業の振興—北海道命名150年によせて—. 楽水, 863, 49-51.

釧路市総務部地域資料室. 2003. マグロの大漁. 写真絵葉書で見る 遠い日のくしろ, 104-106, 釧路市.

戸田恭司・石川孝織 2014. 釧路のあゆみと産業. 釧路市立博物館解説シリーズ, 54p, 釧路市立博物館.

鳥澤 雅. 2004. 釧路における漁業の変遷. 北水試だより, 63, 1-5.

注1 釧路市における二つの水産関連顕彰碑 (1) 佐野孫右衛門「佐野氏紀功碑」. JFSTA NEWS, No.53, 1-3ページ.

頌徳碑

北海道帝国大学総長

正三位勲一等男爵 佐藤昌介 題

北海道帝国大学豫科教授

従三位勲一等 服部品吉 撰

嗟峨久君壽像成矣君秋田人天資剛毅有材幹
夙立志航路抵沿海州從事漁業不如意乃移居干
釧路時明治四十年也 爾來二十有餘年委身干
水産業有聲望君初營鯨旋網漁業既而致力鮭漁
業會大正二年八月漁船十八隻遭難捐命者六十
余人為漸業頓挫君深憂之翌三年自操發動機漁
船冒風？浪從海於是機船漁業遂日勃興到今日
之隆君又興有志謀起釧路機船組合推為其長尋
設魚菜市場為其專務而能・掌事業積大居舉其
他流網漁業組合之設定漁港株式會社之創立等
皆賴君之力君為人重信義厚於友情凡事無公私
幹旋是力以人皆浴其惠宣哉遠邇景慕不已也今
茲昭和庚午有志皆謀欲建銅像以圖不朽？請文
千予予以下文辭之不得命因採撫鄉人所錄叙次
其梗概且繫以銘銘曰

釧海森森 雄嶽巍然 偉哉斯人 芳名永傳

昭和五年 十月